

張紅倫

新美南吉

青空文庫

一

奉^{ほうてん}天大戦争（一九〇五年）の数日まえの、ある夜中のことでした。わがある部隊の大隊長青木少佐は、畑の中に立っている歩^{ほしやう}哨を見まわって歩きました。歩哨は、めいぜられた地点に石のようにつつ立って、きびしい寒さと、ねむさをがまんしながら、警備についているのでした。

「第三歩哨、異状はないか」

少佐は小さく声をかけました。

「はっ、異状ありません」

歩哨のへんじが、あたりの空気に、ひくく、こだましました。少佐は、また、歩きだしました。

頭の上で、小さな星が一つ、かすかにまたたいています。少佐はその光をあおぎながら、足音をぬすんで歩きつづけました。

もうすこしいくと、つぎの歩哨のかげが見えようと思われるところで、少佐はどかりと

足をふみはずして、こおった土くれをかぶりながら、がたがたがた、どすんと、深いあなの中に落ちこみました。

ふいをくった少佐は、しばらくあなのそこでぼんやりしていましたが、あたりのやみに目もなれ、気もおちついてくると、あなの中のようすがうすうすわかってきました。それは四メートル以上の深さで、そのほうがひろがっている、水のかれた古井戸だったのです。

少佐は、声を出して歩^ほ哨^{しょう}をよぼうとしましたが、まてまて、深い井戸の中のことだから、歩哨のいるところまで、声がおるかどうかわからない、それに、もし、ロシアの斥^せ候^{こう}にききつけられたら、むぎむぎところされるにきまつている、と思いかえし、そのま^ま、だまつてこしをおろしました。

あすの朝になったら、だれかがさがしあてて、ひきあげてくれるだろうと考えながら、まるい井戸の口でしきられた星空を見つめていました。そのうちに、井戸の中があんがいあたかなので、うとうととねむりだしました。

ふとめざめたときは、もう夜があけていました。少佐はううんとあくびをしながら、赤くかがやいた空を見あげたのち、

「ちよつ、どうしたらいいかな」

と、心の中でつぶやきました。

まもなく、朝やけで赤かった空は、コバルト色になり、やがて、こい水色にかわつていきました。少佐は、だれかさがし出してくれないものかと、待ちあぐんでいましたが、だれもここに井戸があることさえ、気がつかないらしいけはいです。上を見ると、長いのも、みじかいのも、いろいろの形をしたきれぎれの雲が、あとから、あとからと、白く通つていくきりです。

とうとうお昼近くになりました。青木少佐ははらもへり、のどがかわいてきました。とてもじれったくなつて、大声で、オーイ、オーイと、いくどもどなってみました。しかし、じぶんの声がかべにひびくだけで、だれもへんじをしてくれるものはありません。

少佐は、しかたなく、むだだとは知りながら、なんどもなんども、井戸の口からさがつたつる草のはしにとびつこうとしました。やがて、「あああ」と、つかれはてて、べつたりと井戸のそこにすわりこんでしまいました。

そのうちに、とうとう日がくれて、寒いよいやみがせまってきました。ゆうべの小さな星が、おなじところでさびしく光っています。

「おれは、このまま死んでしまうかもしれないぞ」

と、少佐は、ふと、こんなことを考えました。

「じぶんは、いまさら死をおそれはしない。しかし、戦争に加わっていながら、こんな古井戸の中のたれ死にをするのは、いかにもいまいましい。死ぬなら、敵のたまにあたつて、はなばなしく死にたいなあ」

と、こうも思いました。

まもなく少佐は、つかれと空腹のために、ねむりにおちいりました。それは、ねむりといえねむりでしたが、ほとんど気絶したもおなじようなものでした。

それからいく時間たつたでしょう。少佐の耳に、ふと、人の声がきこえてきました。しかし、少佐はまだ半分うとうとして、はつきりめざめることができませんでした。

「ははあ、地獄から、おにがむかえにきたのかな」

少佐は、そんなことを、ゆめのように考えていました。すると、耳もとの人声がだんだんはつきりしてきました。

「しつかりなさい」

と、中国語でいいいます。

少佐は、中国語をすこし知っていました。そのことばで、びっくりして目をひらきました。

「気がつきましたか。たすけてあげます」

と、そばに立っていた男が、こういつてだきおこしてくれました。

「ありがとう、ありがとう」

と、少佐はこたえようとしましたが、のどがこわばって、声が出ません。

男は、井戸の口からつりさげたなわのはしで、少佐の胴どうたい体をしばっておいて、じぶんがさきにそのなわにつかまってのぼり、それから、なわをたぐって、少佐を井戸の外へ引きあげました。少佐は、ぎらぎらした昼の天地が目にはいるといっしよに、ああ、たすかったと思いました、そのまま、また、気をうしなってしまうました。

二

少佐がかつぎこまれたのは、ほったて小屋のようにみすばらしい、中国人の百しようの家で、張魚凱ちようぎょがいというおやじさんと、張紅倫ちようこうりんというむすことふたりきりの、まずし

いくらしでした。

あい色の中国服をきた十三、四の少年の紅倫は、少佐のまくらもとにすわって、看護してくれました。紅倫は、大きなどんぶりに、きれいな水をいっぱいくんでもってきて、いました。

「わたしが、あの畑の道を通りかかると、人のうめき声がきこえました。おかしいなと思つてあたりをさがしまわっていたら、井戸のそこにあなたがたおれていたので、走つてかえつて、おとうさんにいったんです。それから、おとうさんとわたしとで、なわをもつていつて、ひきあげたのです」

紅倫こうりんはうれしそうに目をかがやかしながら話しました。少佐はどんぶりの水をごくごくのんでは、うむうむと、いちいち感謝をこめてうなずきました。

それから、紅倫は、日本のことをいろいろたずねました。少佐が、内地に待っている、紅倫とおない年くらいのじぶんの子どものことを話してやると、紅倫はたいへんよろこびました。わたしも日本へいつてみたい、そして、あなたのお子さんとお友だちになりたいと、いいました。少佐はこんな話をするたびに、日本のことを思いうかべては、小さなまどから、うらの畑のむこうを見つめました。外では、遠くで、ドドン、ドドンと、砲声が

ひっきりなしにきこえました。

そのまま四、五日たった、ある夕がたのことでした。もう戦いもすんだのか、砲声もばったりやみました。まどから見える空がまっかきやけて、へんにさびしいながめでした。いちんち畑ではたらいていた張魚ちようぎよがい凱が、かえつてきました。そして少佐のまくらもとにそそくさとすわりこんで、

「こまったことになりました。村のやつらが、あなたをロシア兵に売ろうといひます。こんばん、みんなで、あなたをつかまえにくるらしいです。早くここをにげてください。まだ動くにはごむりでしょうが、一刻もぐずぐずしてはいられません。早くしてください。早く」

と、せきたてます。

少佐は、もうどうやら歩けそうなので、これまでの礼をあつくのべ、てばやく服装をととのえて、紅倫こうりんの家を出ました。畑道に出て、ふりかえつてみると、紅倫がせど口から顔を出して、さびしそうに少佐のほうを見つめていました。少佐はまた、ひきかえしていつて、大きな懐中時計かいちゆうどけいをはずして、紅倫の手ににぎらせました。

だんだん暗くなつていく畑の上を、少佐は、身をかがめて、奉天をめあてに、野ねずみ

のようにかけていきました。

三

戦争がおわって、少佐も内地へかえりました。その後、少佐は退役して、ある都会の会社につとめました。少佐は、たびたび張親子^{ちやう}を思い出して、人びとにその話をしました。張親子へはなんべんも手紙を送りました。けれども、先方ではそれが読めなかったのか、一どもへんじをくれませんでした。

戦争がすんでから、十年もたちました。少佐は、その会社の、かなり上役^{うわやく}になり、むすこさんもりっぱな青年になりました。紅倫^{こうりん}もきつと、たくましいわかものになったことだろうと、少佐はよくいいいしました。

ある日の午後、会社の事務室へ、年わかい中国人がやってきました。青い服に、麻^{あさ}のあみぐつをはいて、うでにバスケットをさげていました。

「こんにちは。万年筆いかが」

と、バスケットをあけて、受付の男の前につきだしました。

「いらんよ」

と受付の男は、うるさそうにはねつけました。

「墨^{すみ}いかが」

「墨も筆もいらん。たくさんあるんだ」

と、そのとき、おくのほうから青木少佐が出てきました。

「おい、万年筆を買ってやろう」

と、少佐はいいました。

「万年筆やすい」

あたりで仕事をしていた人も、少佐が万年筆を買うといいだったので、ふたりのまわりによりたかつてきました。いろんな万年筆を少佐が手にとって見ているあいだ、中国人は、少佐の顔をじっと見まもっていました。

「これを一本もらうよ。いくらだい」

「一円と二十銭」

少佐は金入れから、銀貨を出してわたしました。中国人はバスケットの始末をして、ていねいにおじぎをして、出ていこうとしました。そのとき、中国人は、ポケットから懷中

時計をつまみ出して、時間を見ました。少佐は、ふとそれに目をとめて、

「あ、ちよつと待ちたまえ。その時計を見せてくれないか」

「とけい？」

中国人は、なぜそんなことをいうのか、ふにおちないようすで、おずおずさし出しました。少佐が手にとってみますと、それは、たしかに、十年まえ、じぶんが張紅倫ちようこうりんにやった時計です。

「きみ、張紅倫というんじゃないかい」

「えっ！」と、中国人のわかものは、びつくりしたようにいいましたが、すぐ、「わたし、張紅倫ない」

と、くびをふりました。

「いや、きみは紅倫君だろう。わしが古井戸の中に落ちたのを、すくってくれたことを、おぼえているだろう？ わしは、わかれるとき、この時計をきみにやったんだ」

「わたし、紅倫ない。あなたのようなえらい人、あなに落ちることない」といつてききません。

「じゃあ、この時計はどうして手に入れたんだ」

「買った」

「買った？ 買ったのか。そうか。それにしてもよくにた時計があるもんだな。ともかくきみは紅倫にそっくりだよ。へんだね。いや、失礼、よびとめちゃって」

「さよなら」

中国人はもう一ぺん、ペこんとおじぎをして、出ていきました。

そのよく日、会社へ、少佐にあてて無名の手紙がきました。あけてみますと、読みにくい中国語で、

『わたくしは紅倫です。あの古井戸からおすくいしてから、もう十年もすぎましたこんにち、あなたにおあいするなんて、ゆめのような気がしました。よく、わたくしをおわすれにならないでくださいました。わたくしの父はさく年死にしました。わたくしはあなたとお話がしたい。けれど、お話したら、中国人のわたくしに、軍人だったあなた古井戸の中からすくわれたことがわかった、今の日本では、あなたのお名まえにかかわるでしょう。だから、わたくしはあなたにうそをつきました。わたくしは、あすは、中国へかえることにしていたところです。さよなら、おだいじに。さよなら』

と、だいたい、そういう意味のことが書いてありました。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：渥美浩子

1999年7月4日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

張紅倫

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>